

学会ハイライト

第47回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会 第41回皮膚脈管・膠原病研究会を終えて

(平成29年12月8日(金)～10日(日), かごしま県民交流センター)

金蔵 拓郎

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科皮膚科学 教授

はじめに

平成29年12月8日(金)から10日(日)にかけて第47回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会 第41回皮膚脈管・膠原病研究会を「かごしま県民交流センター」で開催いたしました(図1)。「日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会」は「日本皮膚アレルギー学会」と「日本接触皮膚炎学会」を母体とし2007年から合同化されました。一方「皮膚脈管・膠原病研究会」は「皮膚脈管懇話会」と「膠

原病研究会」が2001年に合同化された研究会で、2017年1月に単独開催としては最後の第40回研究会が福島県立医科大学の山本俊幸先生(会長)のもと福島市で開催されています。この学会と研究会は2016年に発展的に合同化し「日本皮膚免疫アレルギー学会」と衣替えること、2017年度は両者を合同で開催することが決まりました。この変遷はアトピー性皮膚炎、接触皮膚炎、蕁麻疹、薬疹などのアレルギー性疾患と血管炎や膠原病等を個別に捉えるのではなく、「免疫アレルギー学」の視点



図1 A会場

から包括する学問の流れに沿うものと思われます。

移行期の学術大会のプログラムを編成するにあたりもっとも頭を悩ませたのは、侃々諤々のディスカッションが特徴で、進行が予定の時間を大きく超過することもまれではない熱い研究会であった皮膚脈管・膠原病研究会をどのような形で組み込むかということでした。プログラム編成のほかにも参加費や学術大会の会計処理をどのようにすべきか、日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会の機関誌である『Journal of Environmental Dermatology and Cutaneous Allergology (JEDCA)』の1冊として発行されていたプログラム・抄録集に皮膚脈管・膠原病研究会の内容を含めるのはいかがかなど、考慮すべき事項が多々ありました。これらについて学会の理事会、研究会の世話会の方と相談しながら学術大会の準備を進めました。

学術大会のテーマは「皮膚科医のための免疫・アレルギー学」としました。臨床と基礎研究を有機的に関連づけて勉強できる内容を目指し、特別講演2題、シンポジウム4編、スポンサードシンポジウム14編を計画しました。脈管・膠原病についてはワークショップとして「血管炎セッション」と「膠原病セッション」の枠をつくり、それぞれのセッションで基調講演に続いて一般演題を発表していただく構成としました。

特別講演

特別講演1は鹿児島大学免疫学分野の原博満先生にお願いしました。原先生は免疫学の王道を行く研究者で皮膚のアレルギーに関する業績も多く、学術大会では「アレルギー性接触皮膚炎感作に関わる自然免疫活性化機構」のご演題でお話をいただきました。皮膚科医にとって研究者としても臨床医としても大いに示唆に富んだ有意義なお話だったと思います。

特別講演2にはUniversity of Manchester, Center for Dermatology ResearchのRalf Paus先生をお招きしました。Paus教授は、毛髪の病態生理に関する「皮膚免疫学」の第一人者で、先生からは

「Exploring the immunology of alopecia areata」のご演題をいただきました。脱毛症を自己免疫の観点から論じたご講演で、脱毛症研究の今後の方向性を示してくださいました。

シンポジウム

1. 「共同研究シンポジウム」

皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会のサポートでなされている研究の成果を発表していただくシンポジウムで、関東裕美先生に「2017年度パッチテスト試薬共同研究委員会研究成果」、橋爪秀夫先生に「薬疹データベース構築の進捗状況」、室田浩之先生に「思春期アレルギーの実態調査」について報告していただきました。いずれも日常の臨床に資するところの大きい内容だったと思います。

2. 「免疫アレルギー疾患の病態と分子標的療法」

近年、分子標的療法は大きな広がりをみせていますが、アレルギー疾患も例外ではありません。本シンポジウムではSLE(全身性エリテマトーデス)について順天堂大学膠原病内科の天野浩文先生、Sjögren症候群について筑波大学膠原病・リウマチ・アレルギー内科の坪井洋人先生、強皮症について浅野善英先生、血管炎について岡山大学腎・免疫・内分泌代謝内科学の佐田憲映先生、アトピー性皮膚炎について門野岳史先生、蕁麻疹について千貫祐子先生に、それぞれ分子標的療法の現状についてレビューしていただきました。

3. 「脱毛症」

脱毛症のシンポジウムは、皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会から皮膚免疫アレルギー学会への橋渡しとなる本学術大会を象徴する企画と位置づけました。臨床と基礎の境界を取り払った内容とし、乾重樹先生に「トリコスコピー：どう見る、どう使う」、伊藤泰介先生に「瘢痕性脱毛症と免疫の接点」、大山学先生に「膠原病における脱毛のマネジメント」、下村裕先生に「免疫異常を呈する遺伝性毛髪疾患」、内田洋平先生に「脱毛症の免疫学的病態」のご演題でお話しいただきました。このシンポジウムに続くPaus先生の特別講演と併せて脱毛症への理解を深められたのではないかと思います。



図2 甲冑を纏ったPaus先生を紹介する新聞記事

4.「薬疹」

薬疹も臨床的に重要な疾患で、病態に関する基礎研究が目覚ましい領域の1つです。このシンポジウムでは阿部理一郎先生に「SJS/TENの病態と治療」、藤山幹子先生に「DIHSの病態と治療」、浅田秀夫先生に「薬疹のバイオマーカー」、京都府立医科大学感覚器未来医療学の上田真由美先生に「重症薬疹の遺伝素因ならびに病態解析」、順天堂大学膠原病内科の山路健先生に「薬疹とアフゼルス療法」についてお話しいただきました。

本学術大会では、プログラムに脈管・膠原病のセッションを組み入れるため、時間配分を考慮しシンポジウムは上記の4つに絞りました。アトピー性皮膚炎や蕁麻疹など皮膚アレルギーの領域で馴

染みの疾患についてはスポンサードシンポジウムで新しい知見を得られるようにしました。

「血管炎セッション」「膠原病セッション」

先にも書きましたように、血管炎と膠原病のセッションでは一般演題の前に、基調講演を企画しました。これは「皮膚脈管・膠原病研究会」の伝統を新しい学会に引き継ぐことを目的としており、血管炎セッションでは石黒直子先生、膠原病セッションでは新井達先生にご講演をお願いしました。お二方とも「皮膚脈管・膠原病研究会」で中心的な立場で活躍してこられた先生で、十分に目的を果たしていただけたと思います。

懇親会

学術大会初日の夕に開催した招宴会では鹿児島市出身のシンガーソングライター辛島美登里さんにミニステージを披露していただきました。辛島さんは私の愚妻と中学・高校の同窓で、年末の忙しい時期にもかかわらず快くお引受けくださいました。和歌山県立医科大学の神人正寿先生は「辛島さんのファンでいつも聴いていました。私の青春ど真ん中です」とおっしゃっていましたが、辛島さんの澄んだ歌声とクリスマスの定番曲「サイレント・イブ」には、神人先生だけでなくご参席いただいた先生方にも喜んでいただけたのではな

図3 懇親会にて。
(左から)

筆者

日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会理事長 片山一朗先生

特別講演演者 Ralf Paus先生

日本皮膚免疫アレルギー学会新理事長 戸倉新樹先生

日本皮膚科学会理事長 島田眞路先生

いかと自賛しています。

会員懇親会では2018年の大河ドラマの主人公「西郷どん」も修練した薩摩示現流の演武をご覧いただきました。この日の昼にPaus先生は鹿児島市内の観光を楽しみました。江戸時代の島津家の別邸として有名な磯の仙巖園ではたまたまこの日、観光客が本格的な鎧兜を着けるイベントが開催されておりPaus先生も甲冑で身を包み日本刀を振るわれたそうです。このイベント会場で案内役を務めていた外国人が懇親会でも演技を披露しており、重なる偶然にPaus先生の鹿児島滞在は思い出深いものとなったようです。なお、仙巖園でのPaus先生のご様子は学会期間中の新聞で紹介され、先生は記事の掲載された新聞を喜んで持って帰られました(図2)。

おわりに

今回は2つの学会と研究会の合同開催でした。学術大会を振り返ってみますと、例年80題前後あった脈管・膠原病の演題が41題にとどまったこと、血管炎と膠原病のセッションを並列にしたため、これまでの「皮膚脈管・膠原病研究会」に比べて討論の盛り上がりには欠けるくらいがあったことなど、次回以降に向けて検討すべき点もありました。ただ準備の段階では手探り状態のようなところがあったにもかかわらず、蓋を開けてみると165題の一般演題と800名を超えるご参加をいただき、曲がりなりにも無事に閉会式を迎えることができました。学術大会に参加してくださった先生方、学会運営に携わってくださったすべての方々に謝意を表しつつ、次期会長の浅田秀夫先生にバトンを渡したいと思います。